

♡ 授業実践の紹介

「きょうからともだち」授業協議

筑波大学附属小学校 加藤 宣行
筑波大学附属小学校 青木 伸生
筑波大学附属小学校 盛山 隆雄



加藤先生の授業を見て

加藤 今日授業は、昨日まで友達じゃなかったものが、なぜ友達になれたの？というところで、友達になれる・なれないというのは、相手に対する自分の心構え次第というのに気づかせたくて、そのあたりを色々子どもたちに振ってみた。問い返しをしたときに、もう少し自分の実体験から、違うんだよ、と自分の言葉になっていくことを期待したが、どうも綺麗な言葉でまとめようとしているなという印象を受けた。なんとかそれを崩そうとして、色々突っ込みを入れたという感じの授業になった。ただ、この授業で私がやろうとしたことは、単に教材を読んで「困っている子、新しく入ってきた子がいたら、その子に声をかけてあげて、仲よくしようね。今日から友達というふうにして、友達になろうと声をかけて、優しくあげようね。じゃあちょっと練習してみようか」というような表面的な友達同士の優しさの学習訓練、生徒指導みたくにはしたくないなと思ひ、もとのところで、こういう友達だったら、違う人がいてやっぱりいいんだなというところに思ひを

もってってもらいたいと思って授業をした。
青木 読み物教材をどう読み、道徳的な心の学びにどうつなげるかという話かと思う。こうちゃんとひいちゃん、もう友達関係ができています。そこに異質なすうちゃん存在が出てきた。この子をどうするの、というのがこの教材のポイントだと思う。授業の中で、ここを前提にした話し合いではなくってしまったので、さっき加藤先生が言っていた、抽象的な美しい言葉でしか語れなくなりました、と私は思った。
盛山 この教材の中盤に、「こうちゃんは思い切って声をかけました」と書いてある。普通に、「声をかけました」ではない。何か思い切らなくてはいけいないような、文脈やシチュエーションがあったはず。こういうことを子どもたちに考えさせていくと、すうちゃんの「じゃまをして、ごめんね」と相手に迷惑をかけたことがわかって、正直に謝るという行為が前にある。そういう態度を見たから、思い切って声をかけることができたのかもしれない。話しかけるという行為に、どんな意味があるのか、どんな文脈の中で言うことができるのかをよりよくわかっていく。そういうことが今日の目的じゃないかと、教材を見て思った。



Nobuyuki Kato
加藤 宣行
筑波大学附属小学校教諭 (道徳)
『小学道徳 ゆたかな心』監修

加藤 「友達になろう」という言葉は、どこから出ているのか。背が高くて、ちょっと自分とは違うと思う時点で、気に食わないというか、異質を排除する心が動いている。その心に正直にしていた声がけ前の場面と、声をかけて友達になった場面の違いについて考えさせたかった。相手に対して、この人は自分とは違うという認識をちゃんもった上で、この人が自分とは違うから嫌だと壁をつくるのではなく、この人はどういう人なんだろうかと興味をもったときに、初めてお互いが寄り添える。言葉がけでは寄り添えない。

青木 そこが私と違うところ。
盛山 私も違った。仲よくするコツの一つは、迷惑だな、嫌だなと思っても、理解しようとして、まず相手のことを尋ねることじゃないかと私は思う。もう一つは、すうちゃんの謝るという行為自体も仲よくするためのきっかけ、コツだと、そういうふうに私は解釈している。

青木 すうちゃんから初めて聞いた声が「ごめんね」だったから、こうちゃんが「どうしてそんなに背伸びしているの」と問う気になった。話の展開の中で、なぜそのセリフが生まれたのかという状況を確認していくことで、だんだん受け入れられていくことが、子どもたちの中にわかっていく。そういう過程を踏むことがこの話を読むことの大事なポイントなのではないかと思う。今日は、その状況の把握が子どもたちの中で十分ではなかったのではないかと。

盛山 私もやはりすうちゃんの一言目、「じゃまをして、ごめんね」というのが最大のポイントだと思う。

加藤 それは読めばわかることではないか。読解力があればできること。それでは道徳の授業はいらぬということにならないか。私はこの教材

の中で、だんだん仲よくなっていくとか、相手のことがだんだんわかってきたら仲よくなるということについては、自然に読み取れると思った。「どこから友達になったの？」と聞いたのはそういう意味もある。あとは、「ひいちゃんとうちちゃんばかりいっぱい居たら仲よしグループになるの？」と聞いたのもそういうこと。その発問に対して子どもたちは「そうじゃない、すうちゃんがいるからいいんだよ」とは言ったが、そのひいちゃんこうちゃんだけの世界と、すうちゃんが加わった世界の違いは何か？と問うことで、こうちゃん自身の友達観が変わったというところを、子どもたちに気づかせたかった。

青木 こうちゃんの友達観は、なぜ変わったのか。

加藤 それまで自分の世界だけにいたが、異質なものが入ってきたときに、それに前向きにかかわろうとしたら、見えてきたものがあった。そのきっかけは、盛山先生が言っていたすうちゃんの謝罪だろう。ただ、「そこで謝ってきたから仲よしになれたね、謝らなかつたらどうだったんだろう」という発問ではなく、「こうちゃんの友達観はどう変わったのか」というのを2年生レベルの言葉で聞いたかった。

青木 2年生レベルで考えさせるなら、話の中に戻った方がよい。仲よしのひいちゃんはすうちゃんに対してフラットだから、友達になろうよと言った。ひいちゃんの存在はすごく大きい。ひいちゃんがフラットな心情で、素直にすうちゃんに話しかけて、なおかつ、こうちゃんにいいでしょと念を押して呼びかけたからこそ、3人が仲よくなれた。この具体的な状況を、この教材を通して考えさせることで、「君たちもどう？」と子どもの生活に返してあげることが、この教材を読むことの意味だったのではないかと思う。

加藤 国語的な視点ですね。確かにひいちゃん存在というのはキーになるかもしれないが、ひいちゃんはある意味、自分をあまり出していない。自分をいちばんぶつけているのはこうちゃん。すごくケンカしたり、仲が悪かったりした子たちが急に親友になることがある。表面的に取り繕う人間関係よりも、お互いをぶつける中でわかり合っ

た上での友達関係の方が深いと思う。そういう様相を表しているのはこうちゃんではないか。

青木 確かに大きく話の中で変わったのはこうちゃん。ただ、こうちゃんを変える人物としてひいちゃんが描かれているのだから、ひいちゃんの大切さもとらえた方がよいのでは。

読み物教材を使って学ぶ道徳とは

盛山 今日の授業では、加藤先生の発問が多種多様に及ぶ中で、子どもたちは加藤先生のやりたいことを一生懸命探っているように見えた。

加藤 自分としては、一貫していた。相手も自分と同じようにいろんなことを一生懸命考えているのだから、それをちゃんと受け止めて、相手を尊重するという前提がなければ、友達になるためのどんな行動も成り立たないよというところを気づかせたかった。

盛山 ということは、異質なものと仲よくするためには、相手のことを認めるという前提がないと、通用しないということか。

加藤 そう。違うからこそいいということに気づかせたい。同じ異質でも、そこがいいねと言えるか、それは嫌だねと言うかの判断基準が、子ども自身の中の友達観。それを多面的・多角的に見たときに、自分のものさしだけで見ていたら、この人はこういう人、という見方しかできない。だけど違うものさしを入れることによって、ああそれいいね、そこから新しいものが見えてくるね、それがなかったら、何をやっても通用しないよね、となる。それがいちばん大切という方向性を考えていた。

盛山 異質なものを受け入れようとする心をもつ、ということか。

加藤 そう。

盛山 6年生を見ていて思うが、それは難しいこと。どうすればよいか。

加藤 日常生活では感情論になってしまって、時間が無いから「ごめんなさい」「わかったよ、次からは気をつけろよ」みたいにして収めてしま



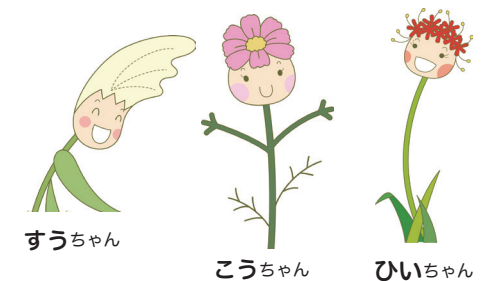
Nobuo Aoki
青木 伸生
筑波大学附属小学校教諭 (国語)
教育出版国語教科書 編集委員

う事が多いが、そういう日常生活の問題意識を、どこかで時間を使って本質まで考えさせなければいけない。道徳の授業はそこをやらなくてはいけないのではないかと。それをやるからこそ、その後のケンカの質が変わったりとか、相手は今何を考えているんだろうかと思ったりとか、少しその人に対する見方が変わって、自分の対応を変えられる。その時に、「あれ、何か変わったぞ」と思えたら、道徳の授業をやっている意味があるのかなと思う。

盛山 その対応の仕方を変えたという例の一つが、「じゃまをして、ごめんね」という言葉ということか。

加藤 そう。それは表層しか書いていないから、表層からもとの心を読み取らせることが道徳の授業となる。

青木 加藤先生の言いたいことはわかるが、読み物資料の中から考えさせたい発問なのか、子どもの生活のレベルで考えさせたいことなのかというところが、子どもがわかっていなかったように感じるし、聞いていて私もわからなかった。どこまで教材をもとにして、どの時点で自分の生活に返すのか、子どもがはっきり区別をつけられなかったのではないかと。



加藤 それはわざとそうしている。これまでの道徳は、表面的な行為・行動の読み取りの訓練・再確認で終わってしまう道徳が多かった。登場人物はこうだったね、じゃあみんなも同じことある？と聞いて、「謝ったら許してもらえて仲よくできた」という自分の生活に振り返らせるだけでは意味がないと思う。だからそこで、今から自分のこと考えてごらん、ではなく、どうしてこうちゃんとすうちゃんはこういうふうにわかり合えて、仲よしになれたのかな？と問いかけて、こういうところがあるな、それをしたら自分たちもきつと……、と自然に自分を語り始めるのが、本来目指したい姿かと思う。

青木 そのもとはこの資料がきっかけになる。
加藤 そう。ただこの教材から学ぶのではなく、きっかけなので、どこかで離れて然るべきと思う。それは教材をないがしろにするという意味ではなく、教材をきっかけにして、新たな気づきがあったら、書いていないところまで気づき始めて、ここには書いていないけど、きつとこれから……と考えが広がっていく。だから、子どもたちに「これから本当に仲のよい友達になっていくだろうね」と最後に言ったのはそういうところを意図している。

青木 ケンカの問題になったことについては、教材から離れたなと思った。この本文の中にケンカはない。ただ、異質を認めるとか多面的に見るということは大事。それを学ばせたい。

加藤 どこまで教材にこだわるか。もちろんこだわるが、どこで離れるか。そのあたりは色々意見が分かれるところかと思う。ケンカはないと言うが、それは表面的にケンカがないだけの話。ケンカというのは、表面的にやりあうとか口論するとか仲たがいがするとかだけではなく、最初のこうちゃんとすうちゃんは、心のもちかたが共に戦闘態勢に入っている。その戦闘態勢がなぜ和らいだのか、というところは、子どものケンカという言葉を使って考えさせられるんじゃないかと私は思っていて、ケンカという言葉を取り上げた。

青木 そうすると、ケンカがなぜ和らいだのかを考えさせると、盛山先生が言っていたような、



「じゃまをして、ごめんね」という謝る言葉であったり、どうして背伸びしているのと聞かれたときにすうちゃんが素直に自分の言葉で話ができたりというような内容の押さえに返ってくるのではないかと思う。

盛山 算数でも、相手に理解してもらうためには、式や図などを使って説明するという行為がとても大事にされている。それらを使って、説明することで相手が、ああそんなことを考えていたんだ、と共感されて、だったらもう少しこれをこういうふうにしたほうがよりわかりやすいよ、といったやりとりが行われていく。この話の中で、こうちゃんが「どうしてそんなに背伸びしているの？」と聞いたことに対して、正直な態度で、泣きながら素直に答えている。これでわかり合えるなどと思う。友達になろうと話しかけたときに、正直に、素直に相手に自分の気持ちを語る、オープンマインドという態度も大事だなということを考えるのではないかと思う。仲よくする背景にあるのは、すうちゃん側の態度だなと教材から感じた。それはやはり浅いというか表面的な読みになるか。

加藤 導入で扱った「友達のつくりかた」は、子どもたちの生活体験が出ているが、これをやればいいというようなマニュアルはないので、何をここで出したっていくらでも突っ込みはある。だから、そういう表面的な、マニュアル的な方法論ではなくて、友達をどう思うかという見方を広げてあげると、応用が利く。盛山先生が算数の時間もそういうことをやっていると言っていた。ただ算数の時間に、違う意見を言ったこの人のおかげで自分たちの見方が広まったといったことを取り上げることは、道徳の時間ではないのでやらないでしょう。

盛山 そういう場面もある。

加藤 もちろん。道徳教育は全教科を通じて行うというのはそういうこと。だから、表層はあちこちにいくらでも見えてくるが、その意味までには気づいていない。なんとなく生活経験上こうすればいいという処世術としてはいろいろもっているが、その処世術のマニュアルが何から成り立っているかを考えさせたい。そうしないと、この時どうしたらいいんだろう？ 学校で教わらなかった、こんな状況わからない、聞いてないとなってしまう。そこでおおもとのところに対して理解があれば、こういうこともあるなというように、自分の拠り所ができる。

盛山 最後に一つ。子どもたちは「フワフワ言葉」と「チクチク言葉」と言っていたが、加藤先生が教えたのか。

加藤 1年生の頃に教えた。

盛山 ここでいう「フワフワ言葉」や「チクチク言葉」というのはまだ形式の段階で、こういう道徳の授業を通して、言葉の質、意味を深めていくということか。

加藤 そうだ。チクチク言葉だってフワフワ言葉になることがある。

盛山 それは低学年だから、形式で教えるのはしょうがない。ただし、今後勉強していく中で使えるものとか、本当の意味をわからせていくということをやっているということか。

加藤 それが緩やかな系統性。低学年はどうしても形式から入るところがあるが、そろそろ形だ

けじゃなく、本当の意味を考えたらうで使ってほしい。

加藤 青木先生と盛山先生、最後に何かあれば。
青木 国語の、多面的・多角的に読む、構造化するというのは、非常に重要な読みの力。これから思考力・判断力というものが求められた時に、一面的に読まないというとならえ方はとても大事。この話はなかなかよい話なので、国語的に読むとしたら、この話の中で大きく変わった人物は誰だろうととらえると、最初怒っていたこうちゃんが優しくなったとか、友達になったととらえるでしょうが、変わった人物はそれだけではない。すうちゃんがあんなに悲しい思いをしていた。生まれた野原や別れた友達が遠くにいるすうちゃんに友達ができたというのは大きな変容。変容するものは1つではないというとならえ方を国語の中でやっていくということが国語の読みとしては大事になる。それを生活や子どもの考え方に返していくのが道徳になるかと思う。ありがとうございました。

盛山 加藤先生は、教科は違えど、実践的な研究をする仲間ですから、今日は誠実に一生懸命見させていただいて、意見を述べさせていただいた。道徳を研究する先生方の前でとても恥ずかしいですが、失礼はお許してください。今日はありがとうございました。

加藤 青木先生、盛山先生ありがとうございました。

